



三養雜記

欠本
四
珍画入

15
1630





三養雜記卷四目錄

頼朝卿放たまふ鶴

かんくわの口

譽替の神事

好文木

瓢の種類

七かんぐさ毛

羊羹 求肥

太く神樂

鞘畫

書を傳ふ鴈

鳥獸の語

十六島海苔

瓢箪の字義

蕪絲

桃栗三年柿八年

月待日待代待

一まつむしよ入道

古池の句



琴明志弓の考

雷公連鼓を負ふ乃圖

木乃伊

天復の古鐘

鞞鞞國

七福神

心猿

行基菩薩の遺骸

つたせん此地藏

守宮の辨

異骨

多賀城碑の里壘

銅鐸

庚申の三株

西遊記

三養雜記卷四

三養雜記卷四

頼朝卿放たまふ鶴

鎌倉由比が濱に頼朝卿の鶴を放たまふと世子あまね

くひの傳ふと吾妻鏡をいめ正き記録よりつく見え

たのみのれ予が管見にて本朝食鑑子源二品之放

鶴亦暨五六百年來往于駿遠之田澤偶觀之者謂

翼間有金札記年號支干云ま南向亭茶話九山の

條子古老此物語小元禄年中二の所此田畑へ鶴飛きた

り數日留り居やれと度ありそ此鶴の足子金の小札

あり頼朝卿の被放い鶴のより小札由急ふ所の民子

被^レ御付鶴の留^マをうい内^ハ番小屋をうけ晝夜守りけり由
 故^ハ今^ニ至^リ鶴場と呼^ハいしと云^ハるるにこれの^ハと^ハり^ハ後
 人の俗説^ハよりて傳會^ハあ^ラずと^モあ^ヤともおも^ハれて^ハ其實
 八九^ノありあ^ハんと疑^ハたりし^ハ過^シ頂頼惟柔の此鶴を詠^ス
 詩を石田醒齋^ガり^テて^ハる^ル彦根侯嘗射^ニ一鶴^ニ足有^ニ
 金牌認^ル其年紀源右大将所放候視而感悼瘞^ニ之湖
 北某卯有鶴塔余聞此事為作長句江州刺史田獲
 鶴鶴繫金牌在左脚題曰建久某^ノ年刺史視^ニ之忽
 慳愕為營兆墳刻誌銘云^ハこの詩よりて年來の疑^ハひ
 一時^ハこ^ノけ^レたり^ハ世人の^ハむ^クつ^クる^ルも故^ハか^キま^ハあ^ハず

頼朝卿真蹟の日記とて影抄本を蔵する人ありその中^ニ
 放鶴の^ハと^ハる^ルその日記^ハ逆頂^ハある^ハ人の作^ハ偽書^ナあり^ト

書を傳^ハつ^ク鶴

雁^ノ足^ハ子帛書を係^ルる蕪武^ノ故事^ハ漢書^ニ足^レて世人の
 口實^トと^スる^ルなり^ハそれと^ハ似^タる^ル雁頭^ノ子書を繫^ルる善友太
 子^ハ佛説^ハ大方便佛報恩經^ニ出^ルる^ハこれ^ハ唐^ノ山^ノ印
 度^ノの^ハと^ハひ^ハる^ル故事^ハ因縁^ノの^ハと^ハり^ハ少^ク實事^ハあり^ハん
 たり^ハその事實^ハを^レた^テて^ハ似^タる^ルハ^ハ叔井日記^ニ爰^ニ子
 ま^ハ世^ハ不^レ思議^ノの^ハ景次^ハ黒井判官^ハ源義^ハ子^ハ後^ニて^ハ島渡^リ
 す^ハお^ハえて^ハい^ハあ^ハる^ル時^ハ子^ハ鶴^ハ金^ノ雌^ノ雄^ノ黒井^ノの^ハ里^ニ子^ハ來^リて^ハ八
 幡^ノの^ハ社^ニ子^ハ遊^ビて^ハ翼^ハを^レれ^テ體^ハを^レ勞^シて^ハハ^ハを^レく^ハい^ハ立^タり^ハ

あつたる社人あやしめてあれを召す鳥線を巻きて、
あをを捕つて召す子飛去とれ、その線解て見へば不
思議の札文字のすりりてい讀ハ願ハ須知れ子孫義子あり
て家城起べし、さあらん子於てハ我ハ神人となりて是を
守護すべし、文治五八景次とあり、又片羽の方ハ故
郷忘れ難くも命ハ義小依て輕く文字松葉子つ
る心底盡し難く、景次文治五八の五印と何る心を極字小
彫付てあり、稱宜不思議子おもひ攝州の多田院敷
子達して仰子但て須知小太郎景元へ達す、小太郎ハ二
の木札子ありつけたる心を至極子達し、大子よるこびり

是を秘し、まてハ判官殿ハ未世よりとせ、景次も生てある
そと獨ゑりて、稱宜おもひ、是を景次高館敷より、取
後の時中も云てい子ハ弓取れ道、うこそそと、涙とあふん、
景元これ鷹金の鳥、とひみれ、ぶらう、勞まを解、
水子うたせて、糸とよふ依て、それあふんと、景元乞受て、
ちま子二鳥、うらう、強く、て餘日と過、おちて、うらう、こ
の線つきて、結ひ物と見れば、おちた、ま、五印とあ
る時ハ、數ハ五風、あて、うれて、おち、てけり、又ハ、別の鳥、み、付て、何
あつ、神變奇特と、感涙を、あふん、又鳥ハ、よ、物、よ、あり、人
ハ却て、道を、あ、ぬ、ま、く、ん、と、い、え、う、う、鷹の玉章、あ、び、
歎、子

もも老どが、三國子よりて鴈の書をつつやうよのあふ奇と
つづぐ、

つづぐ、

童子の口すきふ、鴈こころあとの鴈が先子あつこころ
ふひさりよといつてあり、筑紫がふせもろくつとぞ、
その詞れ日けハ、鴈こころあとの、鴈こころあとの、
子飛行とてつとつと、意あつて、鴈こころあとの、
を先子とて親鳥そのあつて、飛行のれはハ親鳥先へ立
かゝ子と奪取をであらふ、あつて、こころあとの、
むひさひ、訛をあつて、こころあとの、こころあとの、

鍋田晶山之抗紫がふての唱事ハおあ、存と、

さう異る色ハ、そのなまりれまを、
く、志ちやう、
きのん、あを、なれ、
て、

鳥獸の語

劉氏鴻書子、解獸語者、介葛盧、左傳、解鳥語者、
長衝波傳、侯瑾字子瑜、燉煌、又廣漢陽翁仲、解馬語、
論衡、李南亦解鳥語、抱朴子、詹何得牛鳴、知牛黑而
自在、角、韓非子、廷尉沈僧照、聽南山彪、嘯云、國有邊

事因選人丁^シ梁典^シ、^シこらえり^シ猶鳥獸の語を解^ルす^ル事
ハ東谷贅言^シ子介葛盧識^ル牛鳴^ル陰子春識^ル鳥音^ル尸鄉祝^ル
鶏翁養^ル鶏^ル數百^ニ羣^ニ各命^ス之名^ヲ呼^ブ之^レ則應^スま^ル唐闕史^ニ
公冶長^ハ通^ス鳥語^ニ介葛盧^ハ辨^ス牛鳴^ニ著^シ在^リ格言^ニ固非^ニ妄^ニ矣^シ
感通^ハ初有^リ渤海僧^ニ薩多羅^ハ者^シ寓^シ於^テ西明精舍^ニ云^フ能^ク通^ス
鳥獸^ノ之言^ヲ往^キ聞^ク鳥鵲^ハ燕雀^ハ啁噪^ス則^チ詵^シ休咎^ヲ及^テ問^フ巷^ノ
間事^ヲ如^シ目擊^ス者^トあ^レれ^ト其^ノ實^ハい^ハう^チあ^ルん^ニ清^ク約^ク云^フ人^ノ
鳥獸^ノの語^ヲ通^スせ^ル鳥獸^ノ人^ノ此^ノ語^ヲ通^スせ^ル鳥獸^ノの語^モ其^ノ
類^ノ聞^ハ定^テて^ハけ^レあ^ルん^トい^フ人^{アリ}埋^ハさ^ルも^{あ^ルべ^クも}此^ノ
と^スれ^{實^ハ全^クあ^ルん^ト田^ノ文^ノ客^ノの雞^ノ鳴^ヲを^{ま^りび^テ秦^ノ關^ニひ^ク}}

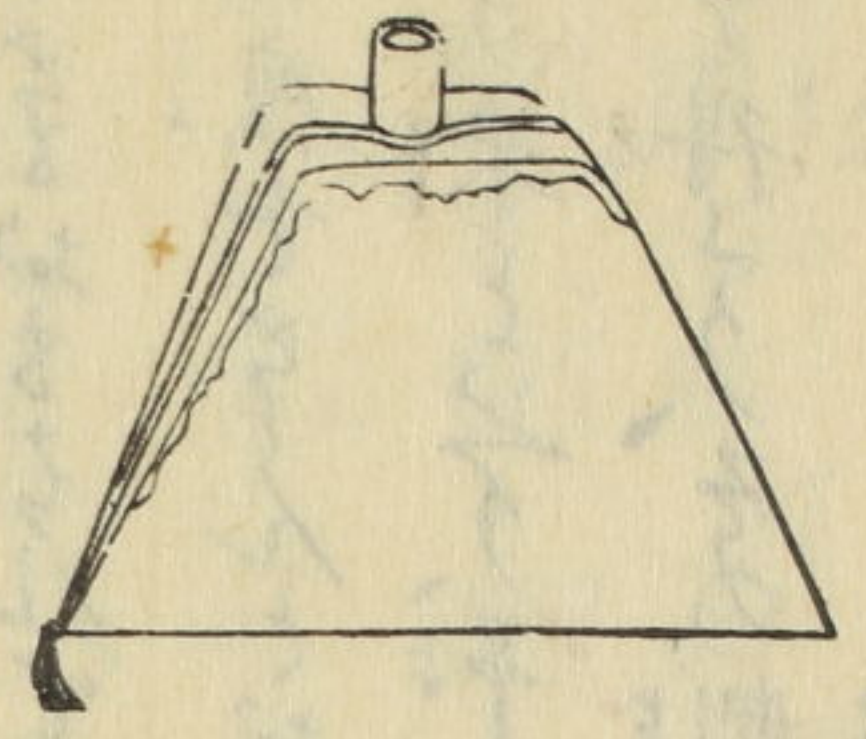
け危難^ヲを免^ルる^ニ既^チ子^ノ微^トと^ス市^ノ町^ニ童^ノども^もあ^つま^りて^ハ
犬^ヲを喚^ビあ^らむ^ハい^ハその^ノ毛^色を^りて^ハあ^らむ^ハ人^ノ名^ヲと^りて^ハ
あ^らむ^ハい^ハさ^あの^ノ異^名を^りて^ハ聲^ヲを^き知^リて^ハ走^クる^ニあ^らむ^ハ
舅^氏のつ^らを^れ小^ノ豎^後園^ニあ^る百^舌を^おす^ノ四^ノの頭^をと^り
ら^てひ^とと^あら^むも^鳴ず^の小^ノ豎^百舌^ノの鳴^聲を^まね^てキ[、]
と^鳴ら^る子^ノ隱^る此^ノ聲^ヲを^聞く^ノ喬^樹の^上に^あり[、]百^舌の^口
四^ノを^見つけ^る飛^來り^をと^りて^ハ先^年京^師に^あり[、]鴉^ノの^まね^せ
乞^食あり[、]一^度鳴^ば多^ク此^ノ鴉^羣に^集る^を見^ます^ハ彼^ノ類^ノ
語^ヲ日^々な^まき^とあ^らむ^ノ動^と二^ハ馬^止り^止と^二之^を行^馬ハ
耳^ニ此^ノ獸^ノとい^ひて^ハ昔^{より}め^でき^との^子す^んど^も何^ぞ其^ノ不^文

あやと孔雀樓筆記子又云う、一の説ガ子さきとて抄りす
 今狩人の鹿もあれ雉もあれ、それ鳴音を笛でまゐるハ
 同輩と抄りひてありき、そのものとそ、ちやくつれ、草子女
 のをらあ、たまたま作さる笛ハ秋の鹿うあ、く、あ、とつハ
 傳つたるとあり、この女此あ、さふく造れ、笛の事い、あ、故
 事うありん、た、あ、さき、誇いひつゝ、た、と、そ、抄り、或
 云三河國安部山の人都子登り名ある遊女の、なる履を
 とりて歸り、笛子造りて阿部山の中子入り、是を吹子鹿此
 多く、あ、と、常のあ、た、ま、作る笛あり、も、ま、さ、り、て、あ、あ
 里といふ説もあれと、こ、つ、れ、草此文子あり、く、あ、う、け、た、こ

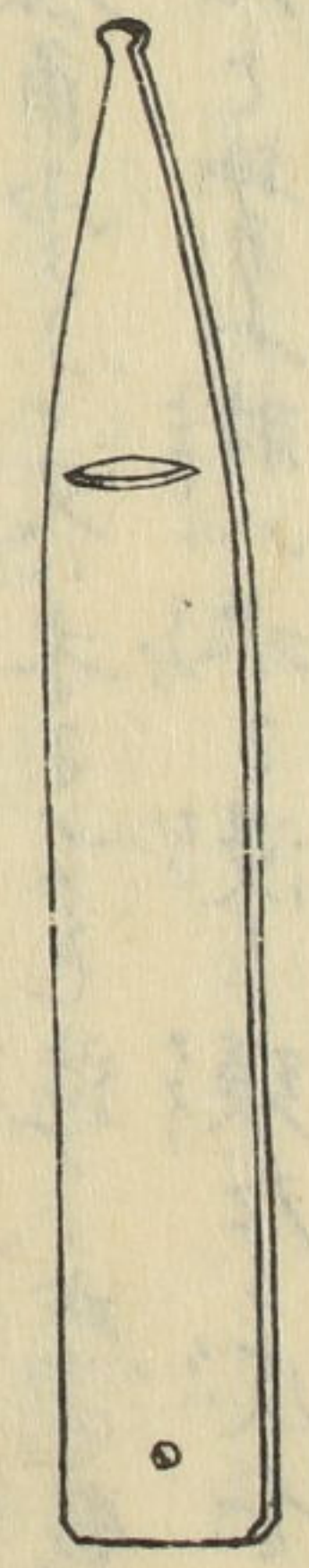
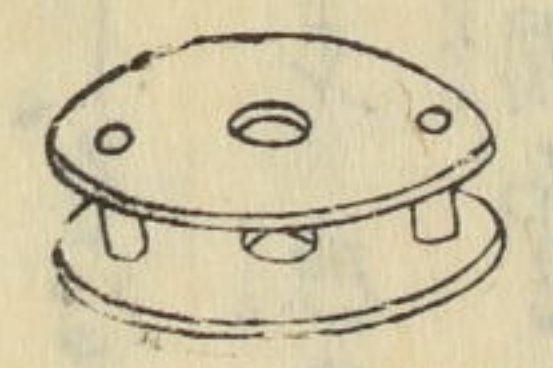
とみやもおもちれておぼつ、あ、そ、ら、あ、れ、く、あり
 狩人の鹿を、と、ん、と、お、り、ハ、時ハ、笛、で、鹿の鳴音を、ま、あ、と、ま
 ハ、自より來と、り、予、ろ、く、上、総國、あ、る、人、子、あ、つ、へ、く
 鹿笛を得、その製、鹿角、く、も、又、木、子、を、造、る、鹿の腹
 おりの皮を、ち、り、て、吹、え、と、抄、り、ハ、水、子、浸、し、張、た、る、皮、を
 潤し、左右、此、手、の、指、を、く、皮、を、こ、ま、つ、吹、バ、さ、あ、く、鹿、鳴、を
 あ、れ、と、真、子、遍、を、り、その、形、ハ、ハ、く、の、如、く、古、代、の、馬、此、焼
 印子鹿笛と、い、ふ、こ、の、形、あり、吾、邦、の、あ、る、唐、山、印、度、小、も
 苗、少、く、鹿、を、こ、ろ、と、あり、太平、廣、記、子、江、陵、松、滋、枝、江
 村射、鹿、者、率、以、陶、阿、鳥、骨、為、管、以、鹿、心、上、脂、膜、作、簧

吹作庶聲有大號小號之異或作麩庶聲則麩庶集
 蓋為杜聲所謂人得教矢而注之とありまゝ心地觀
 經にも心如野庶逐假聲かどをそり鳥をも笛ふてよ
 すこと雀笛ハ常子目もてあつらへるる越後にて雉
 笛あり

鹿笛



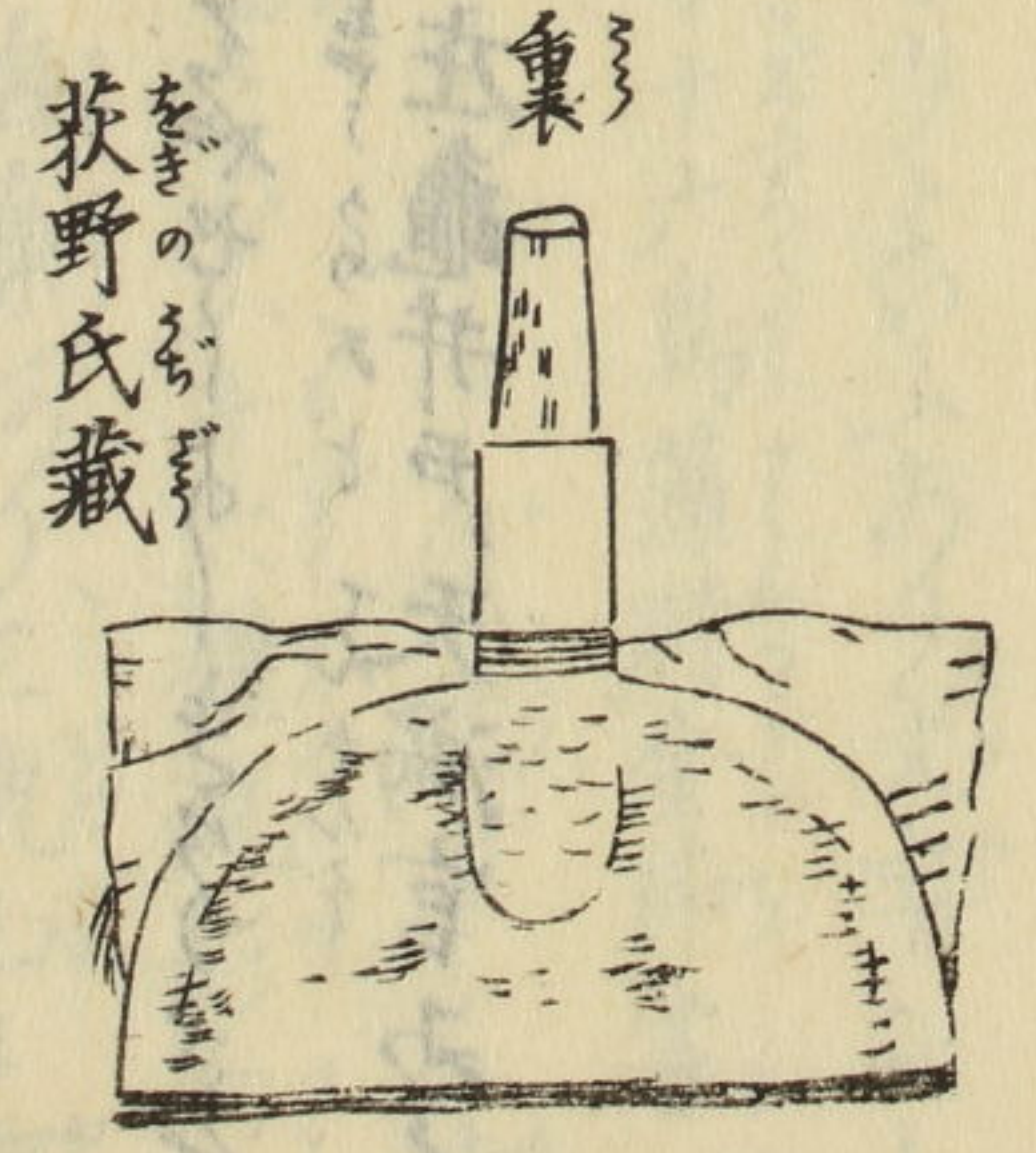
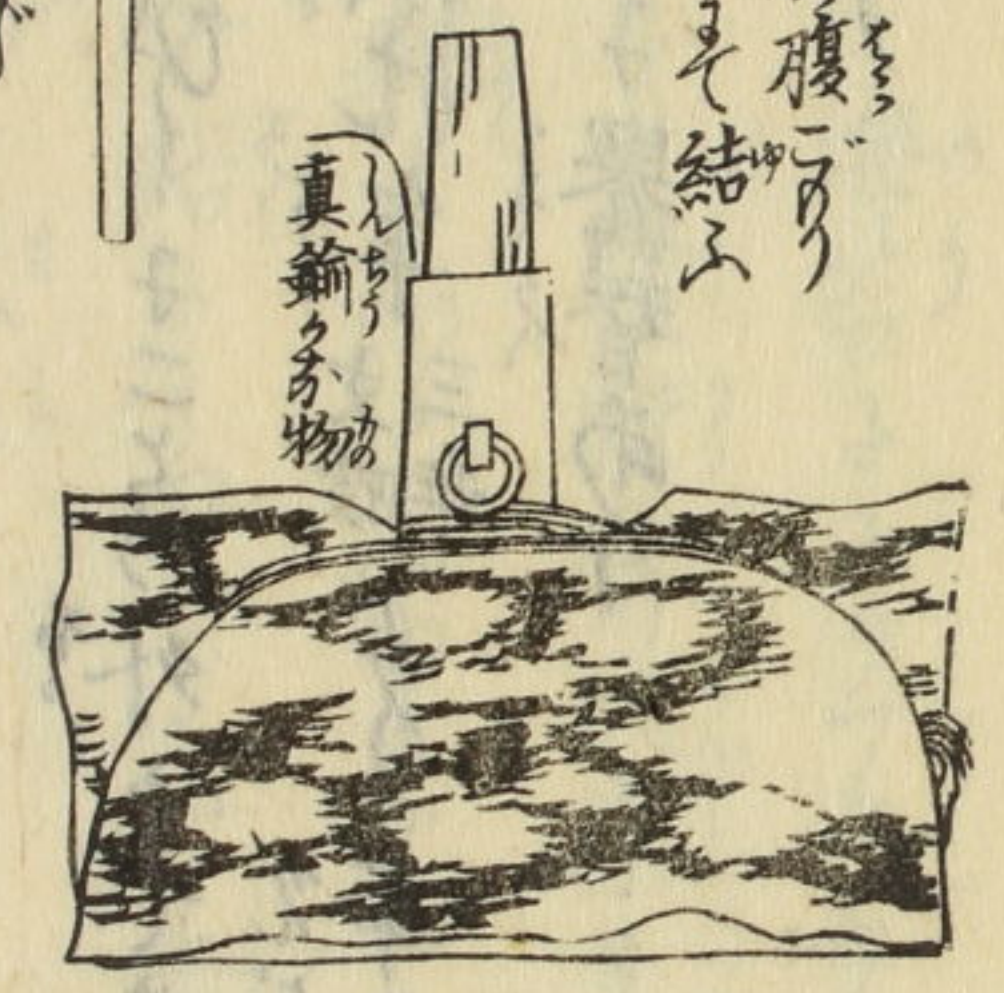
雉笛



右三品は
大サ圖の如し

鹿の角の中造り鹿の腹の
 の皮をナリりめん縁を結ぶ

真鍮にて造り一々の
 如きまめをそひてあり



鶯替の神事

筑紫の太宰府にて毎年正月七日の夜酉此刻ごろより鶯
 替此神事あり今ハ世ふあまねくあるとあれともむらゝハさつ
 とありとある人まれあり貝原益軒の筑前續風土記及び天
 満宮故實あどふんえこれどくろくありあるまゝ太宰府畧
 記に參詣の老若らちつとひ来て木あり作りたる鶯の鳥

と調へ相たうひ子袖子とらうとそえんとと訂正して雙方より
取らうとせり」とあり予ら此地の鷺をせらるやせとらうよせりて
と近ごろ文政二年大坂の天満天神より宰府よりあひひく
あの神事をせらめて執行せしとき大坂あてのちり頃子
こころづらけ神さんうらそとまると子替さんすらんま
そらへおとせり

このふ小房をうらひ子二つの外にてせせりよきまらさて
江戸あてもその次北年文政より本庄龜井戸天満宮より
毎年正月廿五日子鷺替あり

十六島のう

出雲國ありつづ海苔子ウツク九ヒリとのふあり文字子く
八十六島と書たり讀耕齋文集子十六島藻贈金節書一
篇あり名義の釋もあらぬ西ほどありうら素すふ懐
搦談子十六島を俗子らあひ島とよ十六権現影向の
地ありとて水底子氣味ありき海藻あり三瓶山子雪
降てらの浦へげらうる時ふあれ海藻を採まばありと
語らせこれをうらひのうらふ古記子北浦に雜物を注
すくとせらうらひとらふのうらけ此郡の海あり所雜物
ハ海藻海松紫菜疑海草とありハ紫菜此類あり予按ふ
この水底に海苔をとりて露らちうらひ日子るけけハ

うらやみのつと云々をたまたる聲子てうらやみのひ十六
善神島此のつと文字子書てハ言葉あつてき故子善神
と畧して彼俗言のうらやみと云とるのまゝ文字子よま
てしたるものと云えらうと云ふ人より點頭せしむこれ子
て名義のあきなり

好文木

梅を好文木といふとハ軒端梅の謡曲子ありて人の知と
まじも唐土の書子ハたゞて云えらうと云ふ人より點頭せしむ
又えらうと云ふ故事とすとも其のゆゑに云えらうと云ふ人より
謡古也、好文木晋起居注云哀帝讀書則四時隨

之開華故好文木と云あり、東見記子梅云好文
木故事在晋起居注晋武好文則梅開廢學則梅不
開云とあり武帝哀帝いづれも是ありや、説郭をよも
起居注ハ云く收められ、好文木の事ハ云えらう、

瓢箪の字義

俗子ひさごを瓢箪と云り瓢ハひさごをいふまじもか
らまじも箪ハ竹のそと籠あつて瓢ハ自別物をいふれハ世ハひ
さごを瓢箪とよぶハひさごとあり、されどその來るも亦あり
一運歩色葉集子瓢箪の熟字あり室町殿日記子功德水
を汲瓢箪ハ入きをいふとの云えられハ天文のころより已

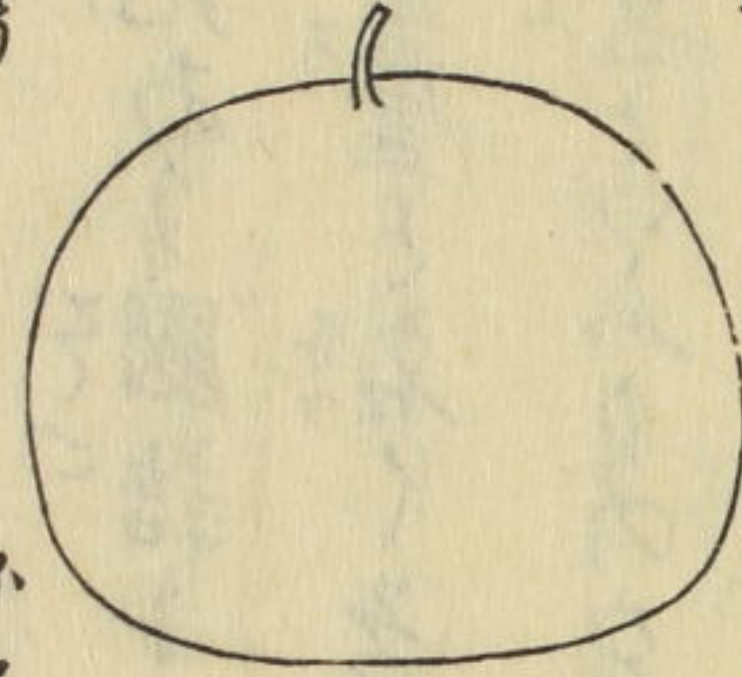
子つるももどぢりをもも、今熟字のようて起るよーをせりつふ
播直幹乃文小瓢葦屢空艸滋顔涿之巷藜藿深鎖
雨濕原憲之樞とのふ句朗詠あも載たれハ人口子膾炙
してあまね々々あはれ一聯ありあもあしらの句此常事とあへ
おれてやぐ瓢葦をひさしらの名不熟字のあまよひあつて
とせりせりさう、わと瓢葦ハ一葦食一瓢飲ありいでる文字
あ、唐土あてハ葦瓢とつげたることおあええさう、

瓢の種類

瓢子くまぐれ種類ありその水子浮づると泡の如くまゝ漂

なとくおれバ匏とも瓢ともさう

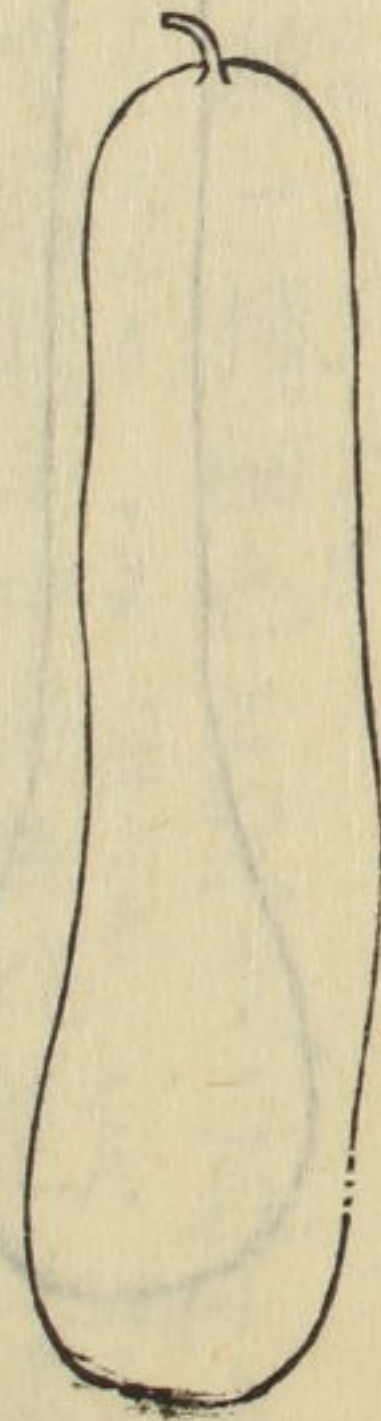
和名 フクベ



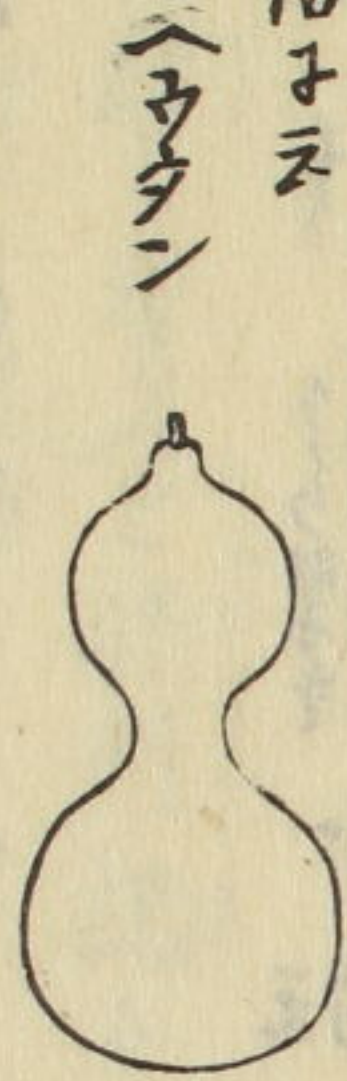
それ長と越瓜の如く首尾一の
どくあゝ大あゝそれを瓢と云
和名ユフガホ

小みく細腰のものを蒲盧

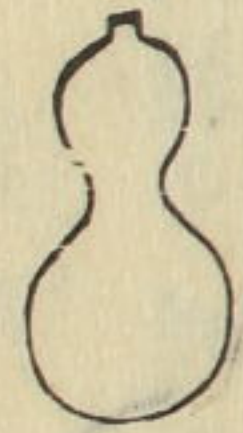
とく、胡蘆といふハ非れり



俗子名



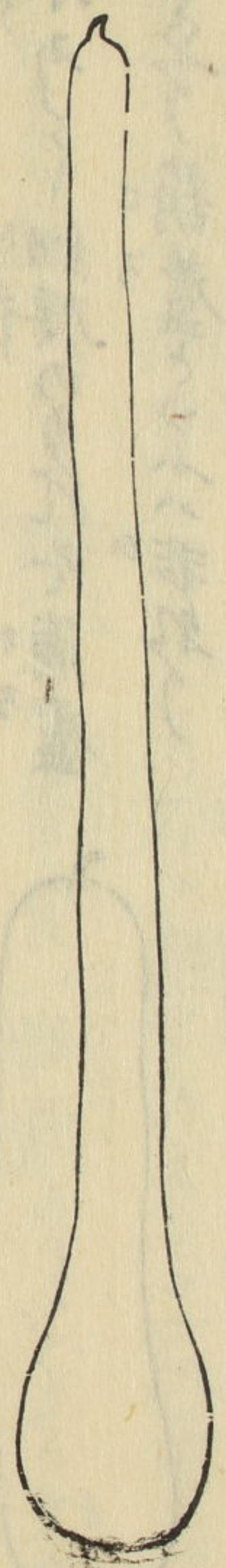
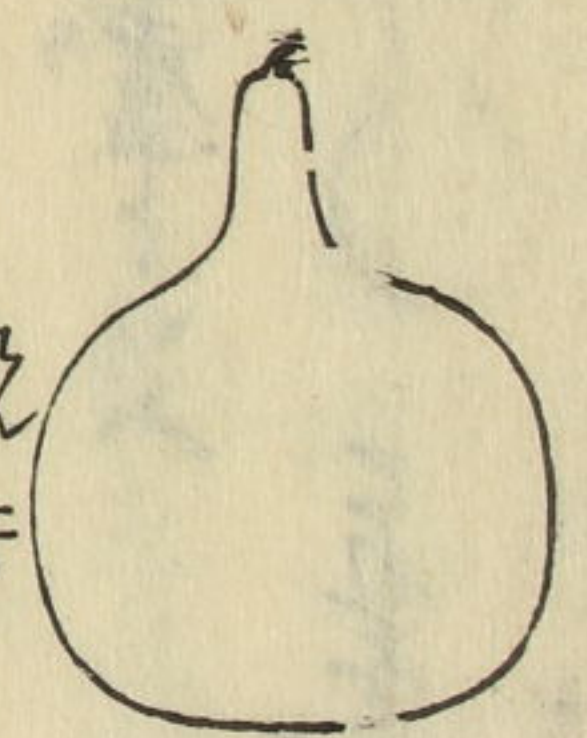
同ドウとあつて至て小わのを
薬壺蘆といふ



これを俗子
センナリといふ

匏カウ子シ似にてまる圓まるくおほ大おほきき短た柄への
ああららのの壺つぼといふ

匏カウの頭くち大おほききで柄えの長ながきゆゆれを懸けん瓠ぼと云



本草カウ子シ苦く匏カウあり國語こくご子シ苦く瓠カウといふ
細目こまめ子シ苦く壺つぼと名なくその味あじ膳たん比ひ如ごと
一詩いちし小せう苦く葉えつといふゆゆののこれこれあり

和名わなニガフクヘト云



藕カウ絲シ

藕カウ絲シといふ白しろ絲いとを賞あや美めと名なめく實じつの蓮れん藕カウの絲シハ
ああらら藕カウ絲シ此こ字じ杜と詩しありといふとうう剪せん燈とう新しん話わの採さい蓮れん曲きょく詞し
子張ハルテ蓮れん葉えつ分ぶん為レ蓋カサ緝しやく藕カウ絲シ分ぶん為レ衣コロモトとあり注ちゆ小せう藕カウ蓮れん根こん放はつ
翁おきな詩し細こ腰こし美み人ひと藕カウ絲シ裳しやう言ごん白しろ紵しよ之ノ精せい細さい也なりといふとううこれこれ子シよ
りりくく井いのの子シ吾われ邦くに大おほ和わの當たい麻ま寺てら綠ろく起き小せう中ちゆう將しやう姬き此こ蓮れんの絲シ
めて曼まん荼た羅らを織おりたといいふとううを世よににままととの蓮れんありといふと
る絲いとといふ將しやう門もん記き子シ蓮れん系けい結むす十じゆ善ぜん之ノ蔓ままま運うん歩ぷ色しき葉えつ集しゆ
子藕カウ絲シ袈け紗さ分ぶんもああらら藕カウ絲シを詭あやつつていふとうう子シハああららぬぬ實じつの
藕カウ絲シハ水みづ氣き乾かハ粉こな碎さいとありて機織きぢの用もち子シ克あつききのの子シああららん

七あんぐそく毛

奉朝國語子伊豆國箱根權現の什物此中ふ悉難が揃毛ありこれ何ののいさををあらん又下総國豊田郡石下村東弘寺此什物の中も七難の揃毛といふれありいそ五色ありて長四丈有餘いよ何物の毛あるとをあらん相傳江州竹生島信州戸隠山あもまにあはありて什物といふ往古異婦あり七難と名くその人此陰毛ぬぐらるる塵塚物語子竹生島七難の毛を載すとるるらむりハ長物のたといふと引いづくいひもそとく尤草紙の長をの志あぐも七あんぐそく毛とあり物産家子ハ山姥毛といふもの

あつしそその實ハいふぞや扶桑畧記子治安三年入道前大相國詣紀伊國云御本尊寺開寶倉令覽中有此和子陰毛注子宛如蔓不知寸尺とありこの毛もりの七難うそく毛此類かん

桃栗三年柿八年

桃栗三年柿八年抽ハ九年子ありうそくといふハ果樹を殖の決あり為憲の口遊子桃三栗四柑六橘七抽八謂之菓子頌今按桃樹栽後三年結子他准之可知とありハ口遊といふ書ハ天禄元年の自序あまハその來とありといふが埤雅子桃三季四梅子十二桃生三

歳放華果早於梅李サイゴウハナクワサゼと云々バイリヨ曲洧舊聞キョウキョウキョウ少毛菓子
易生者莫如桃而結實遲者莫如橘ヤキキヒクモナレ諺云頭有二毛
好種桃立踰膝好種橘盖言桃可待橘不可待コルニモリスダツクニエ和漢同轍コルニと云々

羊羹 求肥

執苑日涉子羊肝糕以紅豆白糖成劑牛皮糖以糯粉糖酒為餅シツエンニツクシヨウカンカクモクソトウダク羊羹求肥ハ羊肝牛皮と書こそ正字セウジあれ羊の肝牛皮子似たるキモウラウよりぬと負せし名ありナれども吾邦の俗獸肉をハ不潔フケツのりれ子也コのりぬと云々よりよき文字不書改フキカめりぬと云々

羊羹の名あり百合羹ヤウケンやう羹ヤウケンかゝる名ナのいでキきんキ六轉ロクテン訛シとらトあアづヅ求肥モウヒもつモねネ子コハ求肥モウヒ餠ヒョウとト云クを信濃シノノあアらラまでハ求肥餅モウヒヒョウとト云クその遠國エンダクにてハ所トコロよりてテ餠屋ヒョウヤと竹細工タケコシする者モノハ市町イチマチ子居コイの尻宿シラヤクとトれレ子住コジマしむシ提オあアらラよりヨりリと云ク餠ヒョウとトらラ名ナをナいイてテ求肥餅モウヒヒョウとト云クこれレ子コつツまマてテ甘アみミいイと云クハ松風マツカゼとトらラ菓子カシハ甘アみミいイと云クハ何ナニもモあアきキとしてシてテ松風マツカゼとトらラ名ナつツらラと云クやヤいイと云ク風流フウリウとトらラ名ナありリぎギをセあアてテてテ子コ聖セイ聖セイ菓カとトらラてテ西面松風サイメンマツカゼと名ナつツけたケたタらラいイと云ク拙ツツとトらラ田舎イノカおオらラと云クハ田舎イノカめメまマてテその製セイ此コノ質シツ并ナヒ好コトしシのノ名ナをナてテ鄙ヒノカたるタるルをセうウてテ風流フウリウとトらラせセしシ也ヤ

るを、それよりあつひて在郷たつと名づけたるまきこえは、田舎
ハ田井中あつひなれば、常の詞おも田舎へ田くといふや、在郷ハ
在郷めとハ、と在郷つゆくといひてハ、義をおさるるがごとく、
こゝにて製す、と在郷といふあり、とまて、物名
そのころハ名義のうあふや、とす、す、とあ、

月待日待代待

辨才天を己己子祭を己待といひ、鷲大明神子十一月酉日
おろつを酉待といひ、或ハ月待日待庚申待廿六夜待とい
待ハ侯の義、あつひ、まら、れ、約語、祭の義、
安齋漫筆子月待日待の持ハ祭なり、ツリ此反子とあ、

あきつうあり、子待ハ子祭已待ハ已祭あり、とつ、ヤ、て浄瑠
璃節の文句、子月まら日まら代まらとつとあり、この代まら
も月まら日まら此例、代祭といふと、代參代垢離
かどの意あり、む、ハ今の代神樂、こゝ町と勧進、來
ぬり、これハ二見真砂といふ伊勢音頭のうゑひの、とあつめた
もの、中小代待といふ音頭あり、その文句、
町をすめて通る代まらハ、おそ、これ身子、先
三日月の代まらハ、弓録のあり、鉦屑多ひすのまつ、鉤子
ハ、奉る立願ハ、士農工商の未、繁昌、
とあつ、紫一本、山伏ハ、錫杖、つて代僧

代參だいさんとよむハちと見え人倫訓蒙圖景じんりんくんぼうずも庚申代待あり、
まも代だいまちハ祈念まねんする人子代ひとこだいて祭まつりよりの舞まわり代神樂だいじんがくと
いふものもちと右みぎふと代待だいまちの類るいにて神樂じんがくを奏そうすまき人子ひとこ
ありて奏そうするありありあり獅子舞ししうまいハ田樂でんがくをこのころやま
れバ今いまも一万度いちまんどの技わざをハうあひひともありありあり大神樂おほじんがくと
くハあさす代字だいのじを用もちひ、

太たい神樂じんがく

太たい神樂じんがくとよむハソウのやどありう始はじめまり乃のちん都鄙とひとよむ
ありあり太たい講かうとよむとさうんは行おこなはれとわと太たい神樂じんがくハ
既すでもこの代神樂だいじんがくハあざとろともえまこの講中かうちゆうの人ひととよむ

ちて神樂じんがくを奏そうするころは代神樂だいじんがくありるをなひとまひ
ミねハ執行しやうぎやうよりあつ重ねて太たいとたえてソウ舞まひと
つくりとよむとあり又また一万度いちまんどの技わざとて幣串へいぐしと講中かうちゆうへ配くわいふその
串くしといふ箱はこを中なか御おんとよむとあつともをうりやふりて技わざ
といふとハ今いまさういふまもあつねと二季ふたきの大技おほわざハ公事こうじにて
中臣氏なかとみし此司こしをりてその技わざを世よ小中臣こなかとみ技わざともソウ志こころするをう
の佛家ぶつが子こもむ經きやうの卷數まきかずありてとあつハいと心得こころえぬ
コトあり大般若だいはんにや此理趣こりゆき分ぶんらハ真言しんげん陀羅尼だらにを千度せんども
一万度いちまんどもよむをよとさう小功徳こくどくありとよむ、その讀よみたる
數かずと記ししたる札ふだを卷數まきかずと唱となへて施主せしゆへあつとあり、今いまの

大般若經をの札といふものハあれ巻數のむらうもくその
札がたやとまきハあやねど巻數をりたるもれやえそれや
うて尊信すもをりこの巻數ハ倣て千度一百度の抜を
とて幣串を祭主へ配とてそのやをれういやくあつ
か

へまむしよ入道

奇跡考子、うろくへの戯子ゑぐへまむしよ入道、やまの井子

望月れうげとゑ子よく似るやとやひあをせて

繪子似たるうろくやへまむしよの月 離屋 立圃

右正保のころれ吟あつるうろくされどこのへまむしよのうろくよ

又のうろくあつるとやわりのせゑハ青蓮院子へまむしよ入道の四百
年以前の物ありその筆者を惜了と遠碧軒隨筆子
又をうろくあつる筆記ハ葉室大納言自畫自賛のうろくと

世世中をうろく

へまむしよ入道

あまきハあつる

あけやそのらん

あつるうろくハ後世のめれもきえんが

鞠畫

鞠畫といふものむらうとあつるとのあれと今ハさうとあつと





鞘畫
この圖は下駄のきこころ
さやを立ててうへをさす

らぬ人もあつ、よつて左ふその圖説をあそを載す、

四

秘苑日涉子池北偶談曰西洋所製玻璃等器多奇
巧曾見其牙畫人物視之初不辨頭目手足以鏡照
之即眉目宛然姣好鏡鏡而長如卓筆之形云熙按
今西洋畫有初不辨何狀以光髮刀鞘照之即人物
鳥獸宛然如生者俗謂之鞘畫此王士禛所謂以鏡
照之者也と云々

古池の句

嵐亭俳話子芭蕉の古池やうらら飛こむ水のおとこひ
句ハ吳融が廢宅詩ト放魚池涸蛙争聚といふより案を
りあられしもあらず此落句子不獨凄凉眼前事咸陽

一火便成原と作まじ焼あとの深川子々々住しとるの
吟あまを此感ありとるも妙なりとるはさあふ
く抑りろく妙なりとる

琴唄と弓の考

あるま弓のおゆこれるまはるるるるで八十の翁り戀し腰を
そとのとるる琴の唱歌とむりより人か志賀寺の上人此
京極の御息所ををめて戀をりしととつらまうけし
こと此も昔をのあ上人此故事子ハ弓子よりたるとるる
あしゆと琴唄ハ一節此中子これれとるあををさるる
上目趣あまを多るれば妙なりとるあまのま弓のそとつら

たゞの義經記子實方中將のあざむけ野邊のあまゆまゆみお
たうすひまきしやふみし、あまぬやどへ何とぞそれんなれての後
はそまぎくやしきとあがれん、おまの野邊を足て過つて
とあり、この詞ををねるあが、よてこれ實方の故事、後拾遺
和歌集子、くらひさぐり、ゆ人のゆと、よまの國より弓とつ
くを、よとよまを、ぐり、る、藤原實方朝臣、

よまのくれあまのま弓、まを、まひひため、まを、まを、
とあり、次子八十の公羽が戀小腰を、まを、まを、まを、まを、
人のまを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、
子貞徳が、淀河小琴の唱歌、まを、まを、まを、まを、まを、
まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、

小琴のまやうり子まを、まを、まを、まを、まを、まを、
まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、
まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、
まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、

くらげせんの地藏

くらげせんの地藏、まを、まを、まを、まを、まを、まを、
たり、東海道名所記、まを、まを、まを、まを、まを、まを、
神通を、まを、まを、まを、まを、まを、まを、まを、
ふともあり、くらげせん、まを、まを、まを、まを、まを、まを、
あり、延命地藏經、地藏十輪經等、まを、まを、まを、まを、

羅帝耶山梵語山名也或譯為驪林山十寶山之一山也
とす、

雷公連鼓を肩の圖

雷公を畫する連鼓を肩の圖ありと云ふは、
王充論衡子
を云ふ世人のあるところあり、あるは觀世主菩薩の眷
屬に風伯雷公あり金剛阿叱婆俱經子雷の連鼓を肩（云と
と云ふは、圖像抄に亦連鼓を肩の圖あり、あり論衡
子俗説と云ふは佛説子ありと云ふを云ふは、
鼓を肩の圖ハ法華經の普門品子雲雷鼓掣電の文子あり
てその聲は響を形容したるやとあり、

佛家ハ猶ありき意もあぶる也再考宋遺古遺文此古篆子
雷字（のり）と云ふの如く子作ハ何と云ふ連鼓の云ふありと
おとす、その窮理説子ハ氣海觀瀾子夫雷鳴即越列吉的
爾之逆炸而與礮聲同其音與雲反響斯聞般云々の理
子於て聞然也、因云佩文齋詠物詩選子山上子雷を聞の
詩あり宋蘇軾云唐道人言天目山上俯視雷而每大雷電
但聞雲中如嬰兒聲、願豐堂漫書子夏日晦菴與客登
顧見山下白霧彌漫若大海然而山頂赤日了無纖翳
俯視突烟暴起或文餘逸至尺許亦無所聞頗異之
後者以為雨作也及下山村麓人云遍有驟雨挾震

雷數百已過矣、向所見烟中突起者悉雷也、凡聲自
下聞之則震、自上聞之則否、所謂山頭只作嬰兒啼
者是已、（此趣子異）富士山をこめ諸高山いづれも此趣子異
あつとれ、文章の妙よその見聞のさるをうり得る

守宮の辨

ありやあり二蟲名實をある人問、（昔より守宮をあり子克まで）的當あり、漢書顔師古註、守宮蟲
名也、術家云、以器養之、食以丹砂、滿七斤、擣治萬疥、
以點女人體、終身不滅、若有房中之事、即滅矣、言可

以防閑滲逸、故謂守宮也、とあるふも、（今のやりの子克）
その證ハ守宮一名壁宮、（壁虎蝎虎）蟬蛻もつて、陶
弘景云、蟬蛻喜縁籬壁間、以朱飼之、滿三斤、殺乾、赤
以塗女人身、有交接事、便脫不爾、如赤誌、故名守宮
とあり、この喜縁籬壁間とありて、ありり、（今）
やりのありと、辨を待て、（あ）やりのと、（名）守宮
此字よりして、（あ）やりのの畧語をも、（あ）やりの家
やりのを常あれば、家子住より、（あ）家守の義あり、（あ）
漢名あり、（あ）守宮あり、（あ）近來物産家子、（あ）龍盤魚
子克と物理小識云、龍盤山乳洞有金沙龍盤魚、皆四

足脩尾丹腹状如守宮といふ事もある、その名を實とあれ
 ばやいあやをあらざる、ありていふ訓ハ井守の義あり、井住
 の意あり、井ハ田子漑流をいふ、今も用水あり、常子溝を
 渠ともいふ、田子あるは、子うきうて井とハ、その流をせむ
 井堰といひ、井子ろを井杭といふ、田舎をみるも、いふも田井
 子住より、あきくも、井より、負つた名あり、今、堀は、井の、人れ
 目、あきく、れハ、用水を井といふを、めづり、く、昔、あ、れ、ど、井、字、ハ
 わと井田より出たる象形あり、書紀あり、神代卷の天真名井
 を、い、あ、萬葉集のあ、う、山、影、さ、い、あ、る、山、の、井、と、も、い、ひ、ま、さ、
 落、た、き、ろ、を、い、い、井、れ、水、あ、と、あ、う、と、い、ふ、よ、ろ、な、と、あ、う、て

も、あ、る、ふ、る、い、

木乃伊

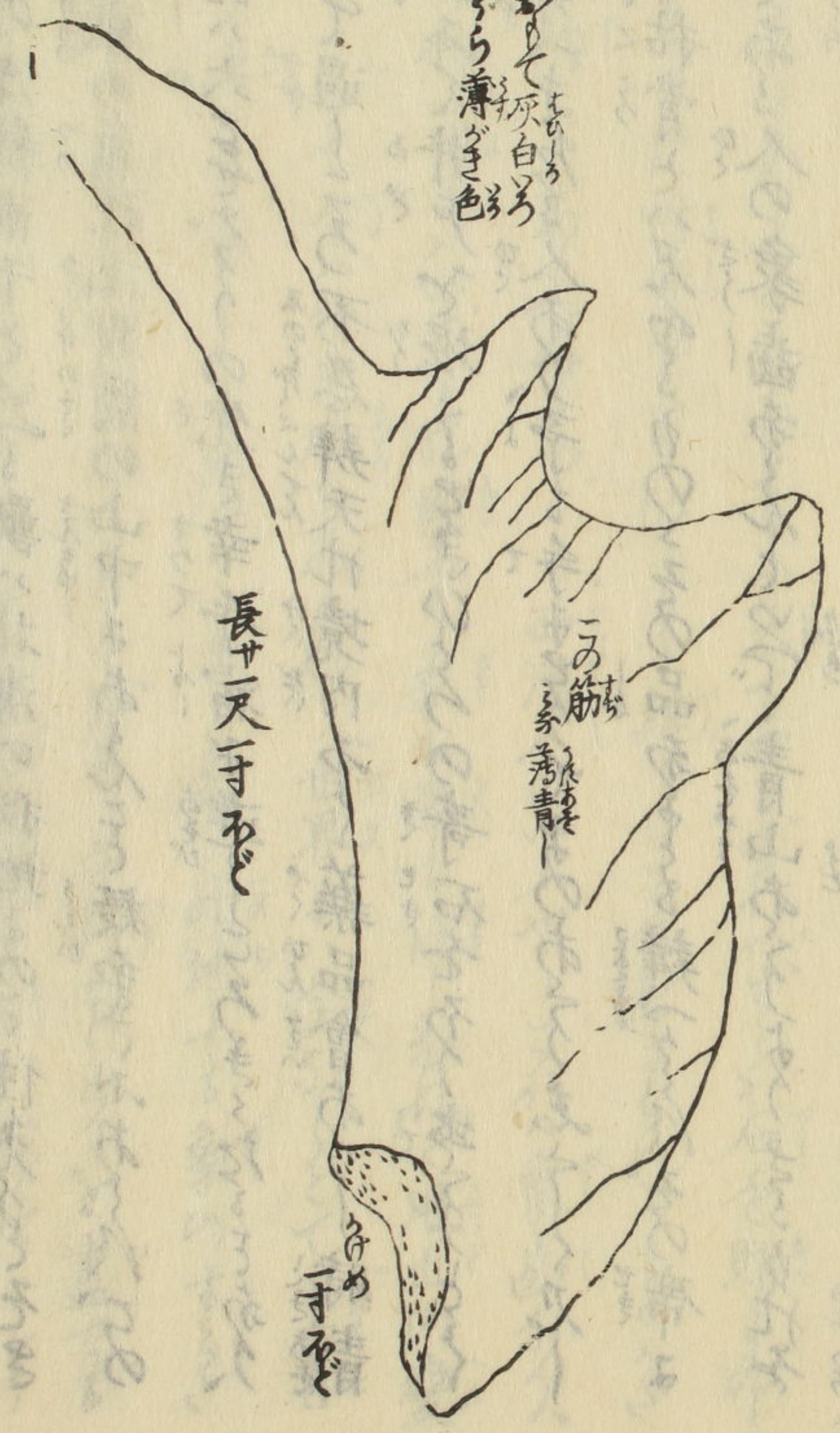
ミイラといふ蜜薬一名蜜人ともいふ、この薬名人口子膾炙
 て、誇、あ、も、い、い、採、の、い、い、あ、あ、と、い、ふ、と、あ、り、ミイラハ、木乃伊
 と書り、輟耕録子、い、え、ろ、ろ、網目、あ、も、本、ろ、あ、れ、ど、も、實、ハ、その
 性のあ、れ、ぬ、り、れ、故、子、く、ま、ぐ、の、説、あ、り、插、林、雜、話、子、木
 乃伊、本、名、ミ、エ、ウ、ミ、ヤ、ア、と、い、ふ、ハ、イ、タ、リ、バ、ル、ニ、ヤ、を、い、う、出、る、こ、れ
 ハ、ル、井、モ、と、い、ふ、薬、を、人、の、尸、に、腹、の、内、子、つ、め、あ、く、と、き、ハ、何、年、を
 磨、て、も、その、容、打、腐、す、と、れ、ハ、先、祖、の、形、容、を、あ、が、く、存、せ、ん
 と、す、ゆ、の、ハ、め、く、の、如、く、と、箱、子、入、て、そ、れ、尸、を、貯、こ、ま、と、多

あづろおく寺の如き館舎あり、その中子印記を見出し易くす、その中子も子孫をえて入用おきハ尸を其館主山野子埋蔵す、後これを掘出しりの木乃伊なりと云う、おりあまのハルサモレ薬氣尸の總身子いく年とあくあまらうたうう功能あまらう

異骨

上野國安中宿の南あり黒岩村といふところ此遍照寺といふ寺あり寛政年間そこより異骨を掘り出さう、その頂江戸へ持ていそあまねく人子にえまゝ名を問ふ曾てあまのあうら幸子阿蘭陀人の來りあいせたり、子うの異骨を

漢鞆爾干といふ獸此角あり、金子竹香のそか、



おきて灰白よりから薄みき色

この筋は青

長さ二尺一寸ほど

一寸ほど

うの漢韃爾干とつる獸ハ北海の狄地てきちの住すえりとぞさ
 る獸の角つれ上野國の山中さんちゆうにありて疑うたがひなき小ありんら
 話ハ六ををりりの先さき幸手宿しゆくに遊あそぶところところきたるきたるとあり
 さて過すしるしる不忍しの辨天べんてん此境内けいありあり薬品會やくひんかいありあり時青
 山しやまふて井戸いどを堀ほりてとまひまひつるの奇石きせきをいていて
 携たへたりたる人ひとあり予よも手てをとりておのありと志しすすくく見みし
 小枯骨ここころとハ見ゆるものその品しやおもも辨べんべんべんその席せきは
 てある人の象齒ざうありとつと青山あをやまありよりさるさるれを
 堀出ほりだへも何なにもぬぬばそれをも定まるぬ過すたりたりつつその後のち
 友人とものつとハ西洋人の長崎ながさきより江戸えどへ來きる路みちのむとて播は

磨すりの海濱うみべふつつきをひひく人ひと此奇きき石いしを拾得しやくとくてて人ひと
 洋人やうじんはは何なにと云いふ石いしと問とふふははどうどう此こののハハせてその石いし
 かりれかりはああえよと志しすすふ乞こてやまされさればばふ石いしを贈おままり
 すすむむとに性質せいしやうをつまひひつつるる辨べんききををたたままれれととる
 々約やくしてああえぬぬと云いふ西洋人のいいふやうやうこれハ象齒ざうあり
 ああるる世よハハつつくく此國こも象ざうも犀せきも住すままれれと風土ふうどの變へん
 化くわはありて今いまハハああまま地ちもああるる世界せかいハハ今いまああとて上古じやうこ
 あり決けつしてああとハいいひひぐぐままとありあり此地こも象ざうのすすく
 小ハハこそ象齒ざうハああるるたためを引ひききててららと書つききても
 ののどうどうぬぬとぞとままりりありてあり人ひとハ上野國の獸角じゆうかく青山あをやま此象ざう

齒も疑へまゝあはれりありああり天地此間小生といはる
禽獸亦此ハ異國子の之を限てすめるものも定めぬ吾邦の
上古ハ佳らんもをり知へる夏蟲の氷を疑もてをり
きふあはれ近き子居て遠を識今子處して古を知ハ惟力の學
此ちくまこそあれと古人のいひえハ確言ありすや

天復の古鐘

過一文化十二年の春西遊せし豊前國宇佐八幡宮少
古鐘を見りそハ御供所といふとそ此軒不けつね子用
也半鐘ありその製はまゝ尾上の鐘遠の太平鐘と同じく
たゞちち小なるの銘識あれど左文にてこそ漫滅して讀へ

うぐと之も天復四年甲子とあり即一本を撮りて
歸り按子天復ハ唐は昭宗の年號にて我延喜四年のあり
まゝ實小希世の古物なり珍重すべきものあり遠境僻地
ハ好古の者もいまも搜得さるも往ておきあはれ狩谷振齋ハ
朝鮮鐘ありとあり

天復四年甲子二月廿日味山林
大昔川流川文藝本匠上味本林主
蓮華一合入金壬午十一月十日

多賀城碑里數 靺鞨國

多賀城碑子甲數を記したる中小常陸國を去る四百里と
 何る三百里ありてハ路程子ありさるものなり。たゞしく碑文子
 おれハいふやもヨミまじく。まづ靺鞨を去ること三千里とある
 靺鞨ハ朝鮮よりハをりて、奥地にて今の滿州北地方なり。
 朝鮮ハ北小鴨綠江を隔て、其境北のぐる別あり唐書ハ、
 高麗地西北度遼水與營州接北靺鞨有馬訾水出
 靺鞨之白山色若鴨頭號鴨綠江特以為漸と見え、
 史を案するふ吾邦へ往來すこと絶す此國の人多く佐
 渡出羽能登のあり、まづ蝦夷地へ著岸のことあり見え

北國より直小海洋をよりて往來せしと疑へり、
 此の國北船つね北國より來しをりて多賀城碑
 小宮城郡西と書たることさもある、さてあの碑を寛文の
 ころこれ國の太守募りてありて、多くの人夫をうけて堀
 いて、この世におもひなく知れども猶それありをりて、先
 文明のころひとたい多賀城碑をありてやがて埋たる
 文祿清談子見えれば、これ話を古老のいひ傳ありたる
 ありて、太守もつるを認められ、まことに、おおよそ地中ハ、
 ありもの埋れあんとする、近來河内國あり石川
 年足卿の墓誌いで大和國宇陀郡八瀧村あり、文祿曆の

墓版を堀つて千餘年を経て野人のため子堀ふると
いふも墓誌あればこそいふべきなりとて掘られしは
貴人の葬埋まらざる墓誌ありきといふれあきあき唐
土あり明の萬曆のころめ邵陽縣北舊城より曹全碑をり
出さるるおきし抄りしきあり土中より金石を堀つると多
といふもやぐ古代の徴ありのいと希なるん

銅鐸

今もたありし堀つてあり阿育王の寶鐸といふ銅器ありそ
の事此にえたる扶桑畧記に天智天皇七年正月十七
日於近江國志賀郡建崇福寺始令平地堀出奇異

寶鐸一口高五尺五寸まゝ續日本紀に和銅六年
七月丁卯大和國宇太郡より堀り三代寶錄に貞
觀二年八月辛卯三河國渥美郡村松山中より堀
獲たりといふなり近くも三河國御油の驛より堀出たりと
鹽尻子載寛政四年三河國谷口村より堀り閑田
耕筆子記に文政八年伊勢國壹志郡下川口村の東風
呂谷あり堀出ると聞ク予も一口を蔵弄りされしと
いふて目撃すその中よりハ寫山樓の蔵品あり奇絶と
す猶諸家子蔵すこと少くは其の圖説の考證したる
書もあれど石山寺縁起の繪子寶鐸を堀出たる圖を載さ

まはこふ幕出す、



高島千春男
千秋幕



右の繪少々の上古より堀出るところの銅鐸と形状と形、
坪のふり畫これ真物を見れば、その名子よりて名づくるもの
ら、ちよとさる形のもの堀出るところやある、

七福神

七福神このふりりと狩野家ありて七福神遊戯の圖を
繪しありむす、今ハ世人のあまなく繪せりてあそぶるに
てもあつとそ、あつ時馬山樓もこのものひ出と七福神の
圖ハづれのあろより又えさるまうとこひくハ狩野松榮此
悉くなるよりあまきものをえんと先生よりハさてこの七神ハ
同異あり、摩訶阿羅耶の七福神傳子ハ辨才天と吉祥天
とありて壽老人あり、書言字考子ハ吉祥天子壽老人も
なると狸を加へると吉祥天なりと壽老人を省ハハさるあり
て、この壽老人と福祿壽ハ同ハ老人星あれり、狸と子
替たるを替りて、狸の謡曲此詞ハ、これをまつるものあつ

富貴の身とあるとあり福神の中へいふ人なるもや、
わく福の神といふ大黒天の事をいふ、そのひとつを
ハ能言此福の神も大黒天あり、さて七福といふ敷仁王
經の文も七難即成七福即生とあり、よるあり、
證此々あり、きハ蓮響雜記より、

庚申 心猿 西遊記

庚申塚とていふる聞ゆる言ざるの三猿を石りて彫たるを道
の傍に立たり、その獼猴れくあり、天台大師の三大部の
中止觀の空假中此三諦を不見不聽不言無比したまふ
とあり、それを猿と表して傳教大師三の猿に刻たまる

とや、此傳教大師の作の猿にあり、けり今の粟田口の
ハ新まりのありと遠碧軒隨筆にいふ、志くは山州
名跡志ハ金藏寺に俗にお猿堂といふあり、三猿の像傳
教大師の作り、をどめ他所安置す也、ありて此を
小移せりといふ、かれハ此金藏寺あり、三猿ハ傳教大師の作と
いふ、又ある人ハ慈惠大師山王七猿の和歌にめとづきて
三猿をつら庚申に傳會せり、ハありぬやといふ、

つづくとき世の中をかり、ハあり、つづくときあり、
見きつてハいふもろか、いふもの、いふもの、いふもの、
つれもあつていふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

何ども見ればこそけふむぐりや又なるまきさるるといふあはれか
 きけはこそそのそくもおかれ腹もたてまきさるるといふまきさるるありき
 心はあはれこれとぞけふむぐり人れありき或いはまきさるるといふ
 見ず聴す言さる三の猿ありと思さるるといふまきさるるありけき
 一の七猿の歌ふありつくりまきさるるといふまきさるるといふありき
 らん、とて未だ一首は、そのまきさるる三猿をよまきさるる、けふむぐり傳教大
 師の三猿此像慈惠大師の七猿此詠をどいづれも心猿子意
 を寓したるものよあはれなり古言も心猿子意をまきさるるといふ
 ろあれ心あはれ心猿子あはれともまきさるる心猿子野猿の逸噪
 比喻するといふあり心地觀經に心如猿猴遊五欲樹不

暫住とあり、西遊記の一書も亦心猿をむねとて玄奘三藏の
 西域に作るるを西域記慈恩傳をよまきさるるといふまきさるるといふ
 話説とぞけふむぐり、これ縁をまきさるるに慈恩傳に唯於
 四禪九定未暇安心今願託慮禪門澄心定水制情
 援之逸蹊繫意馬之奔馳といふ文もあり、これ西遊記の
 縁起とぞけふむぐりとくろくおひひきさるる五雜組に西遊
 記曼衍虛誕而其縱橫變化以猿為心之神以猪為
 意之馳其始之放縱上天下地莫能禁制而歸於緊
 箍一兎能使心猿馴伏至死靡他蓋亦求放心之喻
 非浪作也といふ至當の論なり具眼小説をよまきさるるといふ

ア、

行基菩薩の遺誠

砂石集子行基菩薩の遺誠の文を載て云世々志々人
望あるふ似たり俗子をむけハ狂人れト一あかす世の中とあ
多々實小格言なりと云えたり又同日の談子ハあかす風來山
人ハ放屁論子世間のため子骨ををれハ世上で山師とそ
まど鼠と猫ハ爪をうむハ我よりおあかしく人物とさき
面をやつらかつつ山師ハいそもあつ入ハ藝をりつて山の足
代り我ハ山不似たるをりて藝ハ助と云とつてもまほ慄
慨の意あきあもあはれをり既太史公も天道ハ是耶川

耶とのひたれハ古より心あらん者ハ何れの子こそ詞あいな
世のあらしををいゆ子うあらん古歌ハ

命待おのちとばうり憂とあなぐおをる古歌
天保十一年三月山崎美成三養居北南軒

三養雜記卷四大尾

北峰先生著述目錄

涉史臆斷十卷

六史三鏡ヲハダ野史家衆マデノ事實ヲ高確ニ
サニ史劄記唐史論斷ニ比スベク史學必讀ノ書ナリ

讀四刑書管見六卷

唐ノ世ニ律令格式ヲ四刑書ト云ニヨリテ今ノ四書
ノ中古今未ダ解シカ多事ノ發明アリ事ニ記ス

文教温故 二卷

軍防知新 二卷

先生常ニイフ、文事ハ古ヲ尚ビ武技ハ新ニ從フベシトテ、温故知新ノ字ヲワケテ名
ツケラレタリ古今ニ通ジ文武ヲ兼タル學カコノ二書ニテ知ベシ

歲時要畧 四卷

好問質疑 四卷

筵響雜記 六卷

撩天閑話 二卷

耽竒漫錄 二十卷

駝 薈 三卷

猜 彙 二卷

提醒紀談 二卷

海 錄

隨掃篇

文教温故

二卷 既刻

皇朝古昔ハ經傳律令ノ學、ニテ隋唐ニ後ト至ヒイナハジク學藝ノ興廢訓点
ノ沿革、默圖ノ角筆ノ圖、文字ハ平カフ片カナ和字ノ說、文章ハ瀟文和文俗
文ノ考、且詩歌ノ紀原、整版活字ノハジク、詳ニ考證アリテ初學ニ有益ノ好書ナリ

三養雜記

四卷 既刻

世事百談

四卷 近刻

此書ハ先生世ニ聞エタル博識ヲモテ年来ノ見聞ニ任テ、雨ノツレク夜ノスサミ
怪談、竒說、音曲、遊戯、人情、世態、ハイダ入ノ氣ノツカザル一ロ語ヲ記サレタレハ或ハ
驚クベク又ハ笑フベク春ノ月ノ眠ヲサシ秋ノ夜ノ寐覺ヲモ慰ルオモシロキ隨筆ナリ

猶フ外、琉球入貢紀畧、藥銘考證、ホ、雜著數部、校正ノ書モ亦少カラズ

明治廿三年 寅五月讓受

愛知書肆

愛知縣名古屋市

梶田勘助

鉄炮町廿三番戸

